

第4回京都市総合計画審議会 議事録

日時：令和7年2月3日（月）10:00～12:10

会場：「文化と産業の交流拠点（仮）」（旧富岡鉄斎邸）

出席者：

1 京都市総合計画審議会委員（五十音順、敬称略）

赤松 玉女	京都市立芸術大学学長
安保 千秋	弁護士
小川 さやか	立命館大学大学院先端総合学術研究科教授
榊田 隆之	一般社団法人京都経済同友会代表幹事
阪部 すみと	Tsunagary オフィス合同会社最高執行責任者
杉田 真理子	一般社団法人 for Cities 共同代表/都市デザイナー
鈴鹿 可奈子	株式会社聖護院八ッ橋総本店代表取締役社長
曾我 謙悟	京都大学公共政策大学院院長
高屋 宏章	社会福祉法人京都市社会福祉協議会会長
貫名 涼	京都大学地球環境学学助
濱崎 加奈子	公益財団法人有斐斎弘道館館長／ 京都府立大学農学食科学部准教授
原 敏之	日本労働組合総連合会京都府連合会会長
福富 昌城	花園大学社会福祉学部長
藤野 敦子	京都産業大学現代社会学部教授
プラー ポンキワラシン	市民公募委員
堀場 厚	京都商工会議所会頭
松井 道宣	一般社団法人京都府医師会会長
宗田 好史	関西国際大学国際コミュニケーション学部教授／ 京都府立大学名誉教授

2 特別委員

野村 将揮	ハーバード大学デザイン大学院／京都哲学研究所／ Yamauchi No.10 Family Office／京都大学成長戦略本部
-------	--

以上19名

3 京都市未来共創チーム会議委員（五十音順、敬称略）

大井 葉月	京都市職員（東山区役所）
杉田 真理子 [※]	一般社団法人 for Cities 共同代表/都市デザイナー
田口 成人	京都市職員（環境政策局）
仲田 匡志	株式会社 SOU 代表取締役/U35-KYOTO プロジェクトマネージャー

以上4名

※杉田真理子委員は、京都市総合計画審議会、京都市未来共創チーム会議の双方に所属

1 開会

司会（都市経営戦略監）

ただ今から、第4回京都市総合計画審議会を開催する。委員の皆様におかれては、大変お忙しい中、お集まりいただき感謝申し上げます。本日は、21名中19名の委員に御出席いただいている。また、本日は未来共創チーム会議の委員にもお声がけをしており、3名に御出席いただいている。審議会は公開とし、報道関係者席を設けるとともに、市民の皆様方に傍聴いただいている。また、記録のために録音、録画を行うが、御了承いただきたい。

さて、本日の第4回審議会では、未来共創チーム会議から、これから策定される長期ビジョンに対する考え・思いを報告いただいたのち、第3回審議会に引き続き、長期ビジョンの骨子案について御審議いただきたい。

審議の前に、2点、御説明させていただく。

1点目は、お配りしている資料についてである。添付資料のうち、資料5から資料8について補足する。

資料5は、これまで、未来共創チーム会議において議論してきた内容をまとめた資料であり、後ほど、杉田委員から御説明いただく。

資料6は、これまでの審議会でいただいた御意見を、長期ビジョン骨子案の節・小見出しごとに紐づけした資料である。

資料7は、20歳以上の市民約1,000人を対象に、インターネットで実施したアンケート調査の結果である。この調査は、行政区ごとに、年齢及び性別ごとの構成割合に応じて回答を得た。

資料8は、20歳以上の市外在住者約7,200人を対象に、インターネットで実施したアンケート調査の結果である。この調査は、全国を12エリア、年齢を6区分、性別を2区分に分け、1エリア当たり600件ずつ回答を得た。

これらの資料も踏まえながら、長期ビジョンの骨子案について、さらに議論を深めてまいりたい。

2点目に、第3回審議会でも市長から御説明した新京都戦略について、改めて説明する。新京都戦略は、パブリック・コメントを終え、現在、最終的な詰め段階に入っている。2月に市会へ報告し、3月に策定を予定している。「すべての人に「居場所」と「出番」がある「突き抜ける世界都市 京都」を目指すまちの姿に掲げ、市長任期中の令和9年度までに取り組むべきことを具体的に盛り込んだもので、長期ビジョンを策定した際には、その趣旨を踏まえて、新京都戦略もアップデートしてまいりたい。

改めて、長期ビジョンは、京都市の「理念」を示すもの、個別具体の取組は新京都戦略と毎年度の予算で示していくものという、両者の関係性を御認識いただいたうえで、今後の議論を進めていただきたい。よろしく願います。

なお、次回の第5回審議会においては、長期ビジョンの全文をお示しし、具体的な内容について御審議いただく予定である。

2 議事

(1) 長期ビジョン（仮称）の骨子（案）に係る審議

司会（都市経営戦略監）

それでは、ここからの進行については、宗田会長にお願いします。

宗田会長

本日は、長期ビジョンの骨子案を審議いただく。骨子案の審議に先立ち、資料5「これからの25年、京都のまちづくりにあたって大切にしたい思想・価値観」を御覧いただきたい。未来共創チーム会議において、これまで議論いただいた内容をまとめたものである。未来共創チーム会議を代表して、杉田委員から資料に込められた思い等を御説明いただき、委員の皆様の御意見を承りたい。では、杉田委員よろしくをお願いします。

杉田委員

改めて、未来共創チーム会議と審議会を兼任している、一般社団法人 for Cities 代表の杉田真理子である。普段は、都市デザイナーとして活動している。前回までは、海外出張のためオンラインでの出席であったが、本日はリアルに集まり、委員の皆様と議論ができることをとても楽しみに思っている。どうぞよろしくをお願いしたい。

お手元の資料5を御覧いただきながら聞いていただきたい。審議会と並行して、昨年より活動している未来共創チーム会議では、23歳から35歳までの若者を中心に、メンバーひとりひとりが大切にしている価値観について、リアルの場合だけではなく、オンライン上でも議論を重ねてきた。本日も3名のメンバーが参加している。メンバー全員のバックグラウンドが多様であるため、意見が割れることもあり、また、どのような形で取りまとめていくのかについても時間をかけて議論してきた。そして今回、未来共創チーム会議として、長期ビジョン策定にあたって考慮してほしい思想・価値観や、盛り込んでほしい要素を5つにまとめたので、御報告させていただく。

若い世代はもちろん、子どもや子育て世代、外国人など、老若男女問わず、そして動植物も含めて京都に関わる様々なアクターの意見に思いを馳せたいと考えている。今回の資料では、まとめる過程でこぼれてしまう一個人の思いを記録する形をとった。今日は、全てをお伝えする時間がないが、ぜひ、御一読いただきたい。

3ページ目は、目次である。

それでは、4ページ目を御覧いただきたい。まず、1つ目の要素は「弱いつながりも加味した「0.1市民」を数多く作っていく」ということ。京都のまちの価値は、居住の有無やその年月の長さ、利害関係を超えた、多様性やつながりの豊かさであると思っている。京都に古くから住んでいる住民だけでなく、京都に何かしらの形で関わり続けている関係人口や二拠点居住者など、多様化

するライフスタイルの中で京都に住まう方々、短期滞在の観光客なども、京都という場所を共有するアクターとして捉えることができると考えている。住んでいる人が一つの権利を持っており、住んでいない人は全く権利を持っていないということが現状だが、そこをもう少し滑らかに、0.1パーセントだけ、権利や発言権を持てるというだけでも京都を自分事として考えられる人が増えるのではないか。彼ら、彼女らのビジョンを主体として、0.1の権利、プライドを持つ市民として捉えていくことが可能なのではないか。また、人間だけでなく、動植物やさらにはAIや機械などもまちづくりの主体として捉えていけるのではないか。ここから、人間中心だけではない多様な都市の未来が描けると私たちは考えている。5ページ目は、この要素に関する各委員の意見である。御一読いただきたい。

続いて、6ページ目を御覧いただきたい。2つ目の要素は「京都市民に解釈・行動を委ねる、“無計画さ”や“余白”も大切」ということ。京都は、人々が有機的に動き、多様な価値を作り出してきたまちである。トップダウンに設定される明確な「ゴール」に従って市民が動くのではなく、それぞれが良い意味で好き勝手に、インディペンデントにやっているからこそそのユニークな京都の今があるのではないだろうか。私は、左京区の京都大学の近くに住んでいるが、このインディペンデントさ、良い意味で計画されつくされていない文化に心地よさを感じることが多い。自ら考え、行動していくためには、明確な「ゴール」ではなく、「スタート」をデザインすること、あるいは、その時々での軌道修正の指針となるようなコンパス的な計画が、私たち市民には大切なのではないか。私たちはそれを、多様な価値観を認められ、個々人にも多様な解釈がある「余白」という言葉で表現した。同じく7ページ目は、この要素に関する意見となる。

8ページ目を御覧いただきたい。3つ目の要素は「脱成長・脱競争の社会へ。ベストだけでなくベターも認める」である。日本では人口が減少し、世界では資源の枯渇や資本主義の限界などが議論される今、すべてを拡大、成長方向で考えるのではなく、今あるものをどう活用するか、再配分するか、また現状をいかに楽しむかを考えることも必要なのではないか。経済成長や開発といった一元的な価値観のもと、ベストをめざし、競争だけをするのではなく、高いよりも程よく、速いよりも丁寧に、完成よりも未完・終わりがなく、競うよりもお互いを尊重し合うといった、多元的な目線を持つことが、世界文化自由都市を宣言している京都のまちには必要なのではないか。例えば、エネルギーや資源の使用量を計画的に減少させることや、大量生産、大量消費ではなく、市民ひとりひとりのウェルビーイングを追求すること、GDPや経済効果以外のKPIを行政や企業が設定していくことなどが具体的な方針としてあげられる。9ページ目の各委員のコメントも合わせて御覧いただきたい。

10ページ目を御覧いただきたい。4つ目の要素は「誰もが“育む・支える”まなざしを持つ」である。コロナ禍で明らかになったように、私たちの社会を構成するために必要な「育む」、「支える」、「ケア」というキーワードがこれか

ら大切になってくると感じている。特にこれからの未来を担う子どもたちや、社会的に弱い立場に立たされている人たちの視点も、ビジョンに入れられると良いのではないか。ケアは、子育て世帯に限った話ではない。地域福祉や芸術文化、若者のメンタルヘルスという領域にまで多岐に渡る。近代都市は、社会的強者による、「正しい」とされるまちづくりや開発を進めてきた。そこから派生する政策やデザインも、社会的なマジョリティーや強者のために作られてくることが多かった。そもそも、このような意思決定の場に、より多様な声があることも今までは少なかったように思う。その転換期が、まさに今なのではないか。11ページ目はこのポイントに対する各委員のコメントである。

12ページを御覧いただきたい。最後の5つ目の要素は「超長期目線で考える」ということである。京都は1000年を超える歴史があり、その歴史の分だけ、過去の参照点がたくさんあるところが、他のまちにはない大きな強みである。1000年前から紡がれてきた、京都独自の価値観に立ち戻り、そのうえで1000年先の未来を見据えることが大切なのではないか。とはいえ、予測できない変化が短期スパンで起こり、今まで以上に目まぐるしく、新しいサービスやテクノロジーが登場する現代である。だからこそ、私たちの議論が、10年後にはすでに陳腐なものになっていることもあるかもしれない。そのような時間軸を考えながら、短期と長期の時間を行ったり来たりする中で議論を交わしていきたい。

以上が、未来共創チーム会議において議論してきた内容である。私たちとしては、ここで完結するのではなく、「これからの25年、京都のまちづくりにあたって大切にしたい思想・価値観」について、少しでも多くの方と意見を紡げるように考え、行動し続けたい。どうぞよろしく願います。

宗田会長

未来共創チーム会議からの意見に対して、まず、貫名委員、濱崎委員から御意見を願いたい。

貫名委員

提案いただいた内容はそれぞれ共感する。ただ一方で、未来共創チーム会議での議論と審議会の議論が今までリンクしていなかった、というのは一委員として体感している。それぞれの概念は非常に理解するが、骨子案とどのように結びつき、ビジョンとどう組み合わせるのかが大事なところである。

宗田会長

それは、我々のこれからの仕事でもある。決してバラバラで良いものではないので、どのようにつないで、どのように共感、共創していくのか考えたい。

濱崎委員

非常に面白く拝見し、また直接御説明いただき、そういうことなのかと分か

るところもあり、非常に勉強になった。貫名委員からの御指摘のとおり、どのように反映できるのかと同時に、字数が限られた中で、文字で見るものになるには工夫が必要。どの部分を文字とするのが良いのか考えているが、答えは出ていない。しかし、ヒントはたくさんあった。

例えば、市民アンケートからは、暮らしのうえでの困りごともある中で仕方のないことではあるが、近視眼的になっている。そのような時に、1000年先のビジョンを作る、長期の視点を提供する、あるいは長期の視点から見て今を提示することが役割と思う一方、今そんなことを言っている場合か、ということもあるため非常に難しい。

未来共創チーム会議の意見において、「実感できる」という言葉があった。「網の目の一部としてあるという事実を感じられたり、可視化できたり」、「自分の役割を理解する」、「小規模で実験的なプロジェクトが自然発生する環境」があるという具体的な点、コンパスという話も面白い。これらは、嗅覚を磨くという、より身体的な話である。それを最終的に言葉に落とすにはどのようにすれば良いかヒントになる。ゴールとスタートも納得する一方で、いろんな解釈があることがあって良いのは、今まで当たり前のこととしてあったはずであることを思い出した。ところが、そうではなく、やり方や解釈、答えをこの数十年間教え過ぎていた歴史があった。では、どう開いていくのかは、以前のような言葉の提案の仕方では同じようになるので難しいが、ヒントになった。

最後に、13ページに「必要なタイミングで重要な参照点を見いだせるかどうかという点にはテクニックが必要だ」とある。すごく大事なこと。例えば、なぜその環境が取り壊され、評価されなくなっているのか。今までは、自分で解釈することができたが、気づくためのタイミングやきっかけを作ることが必要な時代だと改めて考えさせられた。その仕組みを提案できれば良い。非常に刺激的な提案であった。

宗田会長

個別に詰めていく論点がいくつかあった。
では、プラー委員、お願いします。

プラー委員

未来共創チーム会議の意見で共感したのは、3点目の「脱成長・脱競争社会へ。ベストだけでなくベターも認める」。私が来日したのはバブルが崩壊した頃。それまでずっと頑張って、経済的にも発展してきた日本だったが、そういうことではない、ベストだけでないベターを認めることが、これからの日本社会にとっても重要。一人一人のウェルビーイングは、個々が幸せであれば、全員が幸せになるということなので好きな言葉である。

宗田会長

これまでの25年、あるいは50年、戦後の80年、京都は落ち着いてきた。

1000年先の超長期目線で考えられるほど豊かになってきた。脱成長と表現されるようなゆとりができてきた。若い方が恵まれていると思っているかは別かもしれないが、その恵まれた環境をどう生かし、世界のために貢献できるか。決して京都だけが良ければ、ということではない。そのような頼もしい議論が進んでいると改めて感じた。

では、安保副会長、お願いします。

安保副会長

未来共創チーム会議の意見を聞いて、若い人はそうなのかと衝撃を受けた。例えば、1点目の「0.1市民」。京都を訪れるいろいろな方の声を聞こう、ということとはよくあることだが、その人たちに0.1の権利を与え、主体として認めていこうということ。権利を与えることは、与えるほうには義務も生じることにつながり、守ったり、様々なところで手当をしていかないといけないことになる。しかし、声を聞くのでは足りないということ、思い切って言われたのだろう。

また3点目の「ベストではなくベター」ということは、様々な価値観の中で言われていることだが、ベストを求める競争が激しい中で、京都市のビジョンとして、その価値観でやっけていこうとされている。どうしても一定の年齢になると、そう言っって良いのだろうか、と思ってしまうのだが、若い世代は、そうじゃないと京都らしさや市民が幸せで生きていけないという価値判断があるのか、というところにすごさを感じた。

4点目の「ケア」については、高齢者もどんどん増えていくので、高齢者にも必要。お互いに力のある人だけでなく、全ての方々が京都で暮らしを確立していくには、ケアの思想をいつも持っていないと厳しいことがよく分かった。これを長期ビジョンに反映できるとすごい。根底にある価値観は大事。これまでの議論も、根底にある価値観を大事にしていこうというものであったが、それを大事に作っていくとどうなるのか楽しみである。

宗田会長

我々審議会では議論しているのは長期ビジョン。基本になるような考え方、思想は十分に共有できるものである。そこは丁寧に議論していくべきこと。

松井市長からも御発言いただきたい。

松井市長

過去10年くらいは、大学生や大学院生と接してきたので、とても久しぶりにフレッシュな気持ちになった。未来共創チーム会議に、部分的にしか参加できておらず申し訳ない。

後ほど、野村特別委員の見解もお伺いしたいが、かなり取り入れられるのではないか。

野村特別委員

そのように思う。

松井市長

例えば、動植物を含めてという、山川草木悉皆成仏という考えは、おそらく野村特別委員は、「待っていました」というものではないか。計画性に対するアンチは、野村特別委員がおっしゃっている「発展に対して我々はやや自省の意識を持つべき」という思想につながる。

民主主義の在り方にもつながる点として、本日のメンバーはそうではないが、どうしても審議会というものは、ある世界の代表であり、濃いつながりを持った人たちの意見集約を得意とする。しかし、薄いつながりを持った人たちの中での、漠然たる将来への思いや希望、不安といかに対話することが大事。「0.1市民」はまさにそう。当初、長期ビジョンの名宛人、主語を誰にするかという議論をしていた。「京都市民は」と語りかけるにしても、その対象は必ずしも住民票を持っている方だけでなく、旅行者や滞在者、勤務者などいろいろな方々、世界中の京都ファンに対して語りかけるべきものということを感じる。

また、ゴールよりスタートライン、問いに対する答えを考えることも大事だが、受験教育が最たるように、答えばかり探し、問いを立てられないことも深刻な課題である。今我々に必要なことは、問いを立てるという意識であると共感した。

総合計画という言葉は好きではない。計画性よりは、2025年から2050年ということだけでなく、1000年を振り返り、我々の知識の範囲で1000年先まで見通して京都というまちを作っていくことを考えるということは、未来共創チーム会議に共感する。野村特別委員もボストンで今うなずいておられる。長期ビジョンについて、骨子の段階でフリーに議論できる機会をいただいたのは良かった。

宗田会長

審議会ではあるが、ここに集まっている我々は、自分たちが代表する機関の既得権を守るために集まったのではない。それぞれが、京都のために何ができるかを考えようとして参加している。京都が世界のために何ができるかを議論したい。その点、従来の審議会とは異なるうえ、既得権が仮にあったとしてもそれが続くものとは思っておらず、刹那的な、時代ごとにあつた形に変貌していく、イノベートしていくものであるべき。企業にとっても、個人にとっても、京都にとってもそうである。その意味で、未来共創チームの提言はその思想にたっているのは明らか。長期ビジョンで生かせると思う。

松井市長

集まっていたいただいた委員の方々には、様々なバックグラウンドを考慮しながら属人的に参加いただいていることを念押ししたい。未来共創チーム会議

というさらに若い世代、バックグラウンドに関係ない方々が集まり、議論いただいたのはとても大切。他方で、審議会委員がどう受け止めながら、現実の政治経済、社会の中でこれを議論していくかがとても重要。

野村特別委員

未来共創チーム会議から御提案いただいた5点には共感している。興味深かったことは、1つ目の「弱いつながりもデザインした「0.1市民」を数多く作っていく」という点。おそらく、私が推薦し、東京都知事選に出馬されたAIエンジニアである安野委員の知見もあると思う。ジル・ドゥルーズという哲学者が提唱した分人民主主義のようなものを読み取れもする。東京出身で東京の大学を卒業して、AIについての理解も国内有数である安野氏のような人がこういった概念を援用しながら議論が織り成されていることは、知的にも刺激的だ。また、伊住委員も同様に友人であるが、御示唆に富んでいて勉強になる。

1点理解を深めたいのだが、安保副会長の御発言との関連で、京都を担う主体としての若者の責任感や義務感について、どのような議論があったのか伺いたい。というのも、資料の2ページ目にあるように、もともとの問いが「未来共創チーム会議メンバーが大切にしている・共鳴する価値観はなにか？」であるため、お話しいただいたようなまとめ方になることは納得できる一方で、この価値観を守っていくのは私を含む若者世代であると理解している。どのような議論のトーンだったのか。責任感や義務感、主体性といったものをあくまでゆるやかに捉えており、あまり明示的に議論されなかったのであるなら、それもひとつの示唆ではあるだろう。曖昧さやハイコンテクスト性つまり文脈依存性、共同体の空気感に基づいて、肩ひじを張らずに、というかたちもあり得る。市長の御示唆にもあったように、近代合理主義的にゴールを設定して進むのではない都市の空気感や姿勢を反映したものかもしれない。

杉田委員

重要な質問で、聞いていただき嬉しい。責任感や義務感、主体性については、最初からキリキリした焦燥感をもって出ていた議題。23歳から35歳の10名程度で未来共創チーム会議は構成されているが、特に自分が若者という認識はなく、それぞれの委員はそれぞれ組織をもっているのも、みなさんと規模は違うが、それぞれの責任をもって組織を運営している。日本の中では、23歳から35歳は若者になるが、ベトナムで35歳はドンのような立場になっている年齢。若者というカテゴリーで会が組織され、議論をしていることにも最初から違和感があった。今まさに起業する、キャリアを形成する中で、これからの社会に対する主体性、責任感はきりきりとした焦燥感はある。このような意見があったから上の世代に考えていただきたい、というフワフワしたものではない。未来共創チーム会議でもSlackを使い、普段から一日に何件もテキストが行きかい、例えば、このような本を読んだ、このような人と議論した、

これはこのままで良いのか、このような言葉づかいで良いのかということ
を日常的に議論した。焦燥感をぜひ伝えたいと思っていたので質問いただき
嬉しい。

野村特別委員

明瞭で示唆的であった。

宗田会長

続いて、骨子案の審議に入る。資料6～8を御覧いただきながら、御審議
いただきたい。

若者は昔から社会の中心にいつもいる。今、50年前や100年前と比べて
何が違うかという、高齢者が増えている。むしろ高齢者がこれほど社会に
いる方が珍しい。我々高齢者の方がニューカマーかもしれない。リタイア後の
人生が長い。若い方が中心だと過剰に期待しているわけではないが、基本的には
若い方が中心であり、主体だと思っている。我々の方がむしろ新しい存在。高
齢者の方が身の振り方が分かっていない。それを大いに反省しないといけな
いが、我々の上の世代はこんなに長く生きていなかったもので、考えさせられた。

すでに議論しているように世界文化自由都市宣言をベースに新しいビジョ
ンを考えていく。世界にどう京都が貢献できるか。世界文化自由都市宣言をよ
り深く理解していくために、文化芸術の立場から世界に対して京都は何がで
きるかという点で、赤松委員に御発言をお願いしたい。京都に京都市立芸術大
学があつて良かった、とよく言われる。京都の世界への文化芸術への貢献につ
いて伺いたい。

赤松委員

議事録で前回の議論を拝見し、改めてということもないが、バックボーンは
関係ないとはいえ、京都市立芸術大学の立場、現在の大学を知っている者とし
て発言したい。

京都市の中に、日本で一番古い画学校が生まれ、現在まで京都市として、京
都市民が支えてきていることは非常に稀有なこと。市立では金沢美術工芸大
学があるが、音楽がない。音楽と美術を備えた芸術大学として、日本で唯一で
一番長い歴史をもっている。京都市立芸術大学が京都にあつて良かったとおっ
しゃっていただいていることにも関連するが、美術館やオペラハウスではなく、
まだ価値が定まらないまだまだこれからの芸術家、音楽家の卵がまちのど真ん
中に来させていただき、まちづくりの軸として機能させていく京都の態度表明
は、今後も大事な軸にしていただきたい。京都には芸術系の大学や学部を新設
しようとしている大学もあり、新しい、真っ白な画用紙に何かを生み出すよ
うな学生が全国から集まっているのは稀有であり、まずはこのことを誇りに思
っていただきたい。未来共創チーム会議から、スタートをデザインするという
意見があつた。大学のまち、芸術、創造的、クリエイティブをめざす人々を育

てる、つまり、はっきりした出口が見えないことを学問として取り組もうとする人材を豊かに生み出すことに関わり、つながる部分である。先ほど様々な未来の姿を示されていたが、現代美術の国際展を見ても、同じように「弱い立場」、「ケア」などいろんなキーワードで作品が生み出されている。

もう一つ、25年前から少子高齢化といわれているが、大学としては、この間、進学率が上がり、女性が進学していくことで、少子化があまり目立たなかった。しかし、今後18歳人口が2～3割減っていくので、今ある大学が熾烈な競争、統合していかないといけないことは現実的に感じる。京都も、これだけ大学が多くあるため、まちの姿はおそらく変わっていく。国は、日本の18歳人口だけでなく、留学生や社会人もと言っているが、世界的にも少子化の傾向。アフリカ大陸やインドなど増加している場所はあるが、多くの留学生が来ている中国においても少子化が進んでいる。これからは日本の大学が変わっていく25年になる。大学がたくさんあるということは、大学資料館や美術館、博物館など社会教育の場がたくさんある。もちろん、公立や国立の美術館、企業のギャラリーも増えているので、大学での教育だけでなく、社会教育の様々な価値観を見て、新たな刺激を受けることや、社会の人たちが大学に入っていくことで学生たちが育てられる、刺激が受けられるような今までとは違う大学の在り方が生まれてくるのではないか。生涯ずっと学び続けられるまちとしての京都是、今後もずっと魅力になるのではないか。

宗田会長

京都市立芸術大学が京都駅にできたことで、世界中から集まってくるアーティストが京都駅に集う場を提供いただいている。京都芸術大学は、通信教育に一生懸命取り組まれている。様々な分野、演劇や造園、庭園もあり独特。京都の可能性は大きいと感じる。

では、小川委員、お願いします。

小川委員

未来共創チーム会議の意見は興味深い。

最近、科研費のプロジェクトで、アジアの複数都市でギグエコノミーなどのデジタル経済に対してどのような反応があるのかについて調査を行った。その中でも東京は変化を受け入れて積極的に変革させていくよりも、安定が大事という意見が多く、やや心配に感じた。他の都市にはイノベーションに対してガツガツしている雰囲気もある。ただ、こうした東京の特徴をポジティブに見直す必要もあるように思った。未来共創チーム会議の話聞いて、野村特別委員からも指摘があったが、ある種のハイコンテクスト性や曖昧性、空気感をもっと全面的に再評価していくことで、様々なことが突破できるのではと強く感じた。というのも、自分の主体性をぶつけ合い、激しく意見を言い合うコミュニケーションが成功しているかということ、新たな争いを生んでおり、必ずしもそうでもない。静かなるコミュニケーション、ハイコンテクストなものがビジネ

スの世界でも評価されつつある。例えば、IT業界で成功している方々も、実はコミュニケーションが得意ではないなど。余白や間など、相手からの働きかけを呼び込むことや、新しいものを受け入れる隙間を持ちながら、察するコミュニケーションが新しい未来を拓く可能性なのではないか。最初に未来共創チーム会議の意見を聞いたとき、基本的には共感はあるものの、革新的なデジタルネイティブならではのガツガツさはないと感じたが、発想そのものが全く異なるイノベーションの在り方や未来の発展のさせ方があるのではと感じた。その意味で、責任感や主体性の概念自体が問い直されるべきだと思う。

宗田会長

アジアの急成長している大都市と比べると東京は異なる。では、京都はどうか。赤松委員も御発言されたように、世界人口が減少に向かう中で少子化は世界中の課題。その中で、どのような若者が世界から京都に留学してくるか、ということのを25年後に考えるべきだ、ということにつながる。

小川委員

そのとおり。受け入れ、察して、巻き込んで、という余地のある曖昧性やハイコンテクスト性は京都の良いところ。

宗田会長

同時に、ガツガツではないところも。小さな体験だが、アジアの留学生からどのように町家を再生するのか、景観政策しているのかと聞かれる。我々は、新しい建築を常に必要としないほど成熟して、多くのものをガツガツ欲しがらなくても良いほど豊かになっている。自分のため、家族のためと言わないほど、寛容になり、世間のために尽くせるようになってきていると答えた。それを聞いたタイの留学生は、「うらやましい、豊かになるということはそういうことか。それ以上のものを欲しがらない気持ちが豊かになるということ。成熟するとは、ガツガツ新しいものに飛びつかなくても良いのか。それならタイも豊かな国になりたい。」と言っていた。そのようなことがあれば、学ぶのではなく絵を見た時に、自分の心が揺れることに幸せを感じる、素直な心の震え方が快感、そのような部分が、京都の本質にある。赤松委員と小川委員の話を知っていると、そういうつながりがあるから留学生にも来てほしいし、学んでほしいと思う。これからの25年の中に通底するようなことと思う。このことを、京都の主体となる35歳までの方たちに考えていただいていることは力強い。

では、原委員、お願いします。

原委員

未来共創チーム会議の資料を読み、感銘を受けた。60歳だが、私たちの役割は何かと考えた。我々の上の方々が京都や日本を作り上げてきた。私たちは、これからの世代の若者との接着剂的な役割を担うのだと考えている。では、次

世代に向けてどう発信するか。京都に住んで、来て、働いて良かったと、全ての方が良かったと思うには、心に余裕を持っていただくことが必要。日本は、中小、ものづくり、特に京都は伝統文化では後継者がおらず、疲弊している。ビジョンの中での書き方は分からないが、ものづくりの重要性は入れていただきたい。昔は、10年ひと昔、50年ひと昔であったが、今は1年ひと昔、ややもすれば1日で変わってきている状況である。長期ビジョンの骨格の中にも、余白や遊び、そのような幅をもっといただきたい。これは、新京都戦略につながることもかもしれないが、そのような視点に立っていただきたい。

宗田会長

では、藤野委員、お願いします。

藤野委員

未来共創チーム会議の意見に共感した。その後の濱崎委員の御発言の中に、「言葉」に関する話があった。野村特別委員にお伺いしたい。言葉には権力性があり、複雑で多様な自然を切り取る力がある。また、言葉には歴史性があり、過去に使われてきた言葉でなければ、私たちが物事を共有したり、理解し合ったりすることは難しい。つまり、これまで使ってきた言葉を用いなければ、コミュニケーションが成り立たないという意味でも言葉には権力性があると思う。未来共創チーム会議から、「0.1市民」という新しい言葉が出てきた。これから先のことを考えた場合でも、歴史でつながってきた言葉を用いて表現せざるを得ないが、より先を見据えるのであれば、骨子案にこうした新しい言葉を取り入れられないか。未来共創チーム会議では、いろいろ考えられた言葉が使われている。「余白」もそう。深く、思考の広がりを持たせる言葉が使われていると感じた。新しい言葉を使うと、共有が難しくなるリスクもあるが、何かが伝えられた時、新たな認識が社会に生まれ、未来の構築にもつながっていくのではないか。

野村特別委員

おっしゃるとおり。英語で“conceptualization”、すなわちコンセプト化するという語があるが、ある概念に名称を付与し規定することで、いろいろなものをそぎ落とす暴力性や権力性がありながらも、それによって構造化や単純化が進み、世の多くの人に共有されてナラティブに用いられやすくなるといったことは歴史的にも多く見られた。この長期ビジョンの起草は昨年4月頃に打診があり、以降、努めて安易に流行しやすい目新しい言葉を使わないようにしてきた。それをしてしまうことで、アテンション・エコノミーの潮流に飲み込まれる可能性もあると危惧してのことである。

「余白」は、いわば同世代的記憶のように我々の世代では割と頻繁に使われている言葉ではある。一般に、特定の世代において共有され好まれている言葉というものはある。こういった言葉がまとうトーンや空気感を概念化して言葉

に落とし込むのか、歴史や源流を引き受けてそれらに寄せるのか。私の態度は基本的には後者であったが、前者とのバランスも考えていきたい。

藤野委員

そもそも日本語は、一つの単語の多くの意味を含むことが多い点で、西洋言語とは異なると思う。そのような特徴を持つ何か良い言葉を見いだせる場合、それも有り得るのではないかと思った。

宗田会長

言葉はひとつひとつ議論しながら大切にしていきたい。

余白の思想は、“marginal”、欄外、余白に取り残されてしまったという意味もある。SDGsは、「誰ひとり取り残されない」という意味で“margin”を使う。余白という言葉は、いくつかの面を持っていて、余白がないといけないというが、未来共創チーム会議の意見にもあったとおり、余白を残したけれど、余白に取り残された人がいることもある。なので、気を付けないといけない。新型コロナウイルス感染症が蔓延した時でも、すべての人に目を配る難しさがつくづく分かった。人のつながりや社会と家族の在り方を考えさせられた5年間。余白をいろんな意味で考える機会になる。

野村特別委員

委員の先生方に、今後の審議会でも御意見、御示唆、御教示いただきたいのだが、こういった種類の議論で前向きに使いたいと思っていたものとして「身体性」という言葉がある。他方で、この言葉もかなりメディア等で使い古されておき、チープな雰囲気をもっているきらいがあるようにも感じている。とはいえ、ある種のハイコンテクスト性や、責任感や主体性の希薄な在り方というのは、明言されることなく共同体や都市空間なるものを身体で引き受けているような側面もある。赤松委員のお話にあった生涯学び続けていくまちという考え方は生涯学習につながり、職人や芸道とも親和性が高い。

こういった話をまとめる概念として「身体性」といった言葉も使ってしまうのだが、やはり安直は避けたく、むしろいまの世の中で「身体性」という言葉で語り切れていないものは何かということに5年ぐらい前からずっと考えている。この長期ビジョンにも書き込みたいと考えているが、おそらく「身体性」をさらに深い次元で言い当てることができれば、長期ビジョンの主軸の一つになり得ると思っている。

また、いわゆる西洋的な伝統、今日日において支配的な価値観や規範は、心や認知が身体より先立つことを前提にしている。もっと二元論的に言うと、自己は他者に先立つ、つまり自己ありきであり、また、自分の心や認知ありきで身体はそれに従属するということが、すごく単純化するとデカルト以降、数百年支配的である。他方で、例えばバッティングセンターで実験すると、どうやら脳よりも皮膚が反応しているらしいみたいな話などもある。こういった反応

が蓄積して記憶されていくときに、心や意識がどこにあるのか、AIは心や意識をどう代替できるのか、といった議論にも関わってくる。

まとめると、「身体性」と簡単に書いてしまえるものを、どう表現するかずっと悩んでいるので、この点について、本日に限らず今後も御意見・御示唆をいただきたい。

もう1点、ここまでは「身体性」という言葉を例として出してきたが、こういった概念、角度、視点が、「身体性」以外にもあり得る。もしそういったものが思い浮かべば、ぜひ御教示いただければありがたい。僕は若造で限られた経験しか有していないので、ぜひ委員の先生方から勉強させていただけると幸いである。

宗田会長

京都の芸術的な蓄積、文化的な歴史の中から、必ず答えが見つかると思う。先生方に期待する。

では、堀場委員、お願いします。

堀場委員

私の歳になると何となく話しにくいですが、1つ大事なことは、実年齢よりも精神年齢が大事ということ。若い人にも非常に年寄りのような発言、古典的な発言している人が、最近、結構多い。私はよくそれを「教科書的」と表現する。やはり日本は教科書のとおり、良い点数を取れば優秀だとされてきたが、いわゆる「クイズ王」みたいな人たちが、非常に大きい顔をしている。私も仕事柄、7～8割が海外の仕事であり、働いている人も7割近くが外国人。そこで大事なものは、知識もそうだがどれだけ知恵を持っているか。あるいはクリエイティビティというか、独創力を持っているかどうか勝負になってきている。日本が相対的に弱くなっているのは、「クイズ王」ばかり育てて、いわゆる知恵を出す人を育てる教育になっていないこと。一番わかりやすい例は、自動車の教習所、皆さんドライバースライセン取得のために通うが、そこで「優」を取ったドライバーがF1ドライバーになれますかということ。いくら教習所で優秀なドライバーをたくさん養成しても、F1レース、いわゆる世界レースには勝てない。みんなF1のレーサーだと事故だらけになるので、それはそれで問題だが、そこは程度の問題。

もう1つ、海外の人をマネージして、なぜロイヤリティがついてくるのかと思ったときに、一番感じるのは、自分が小中学校で、京都のまちや四季、山とか川とか含めて、我々が小さい頃はそういう良さを学校で習った時の感覚、いわゆるプライドを持っていると、彼らはそれに憧れを持ってくる、ついてくるということ。彼らを京都に連れてきたときには、単なるビジネスだけではなく、京都の食文化やお花、お茶、お寺など見るが、京都は総合力が圧倒的。フランスの経済界との会合で、私は日本側の議長だったが、フランス側の議長から「パリもフランスも京都には勝てない」と言わせたと喜んだ。京都の多様性は非常

に大きな価値があると思っている。しかし、京都にいとそういう良さに意外と気付かない。そういうことを系統立てて学んでいくことも大切。特に小中学校の子どもたちに、将来の京都を託していけるような教育をきっちりしていくことが大事ではないか。

20代に感じる感性はすごく大事。その時に、こういう社会がいい、こういうふうにしたいという思ったことが、30歳、40歳、我々のような歳の時に、具現化するチャンスがくる。逆に若い時に気付かないと、残念だが50歳、60歳になって気付くと、もはや遅すぎる。その意味では、世代というか、小学校の時から我々のような歳になるまで、ずっと連続性がある。経済界でも、東京にはリーダーがいて、これと言ったらついてくるが、京都だけは言ってもついてこない。それほど価値観が違う。ついてこないが、いざというときには団結する。これも東京と京都の全然違うところ。そのあたりをうまく表現できると、ただ単なる書き物ではなくなる。こういうものは、私もほとんど読まない。面白くないから。だから面白くした方がいいと思う。あまり教科書通りというのは、真面目すぎる。書いている人は不真面目なのに、書いていることはすごく真面目。逆にした方がいい。

宗田会長

こういう話ができるのが審議会の面白いところ。様々示唆に富んだ発言ただいたが、確かに20代の時に感動したことが50代、60代になって、という体験がどれだけできるかが大きい。京都の良さが分かるには、フランス人のスピリット、教養がいると言う人もいるが。

堀場委員

本当は逆。京都のことを理解しないと、フランスのことは分からない。歴史が全然違う。

宗田会長

逆に京都を深く感じられる人でないと、フランス文化の本質もわからないというのも全くその通り。それを感じ取っている人だけで満足してはいけないので、子どもたちに感じてもらって、体験してもらってということが重要になる。それは、新しい教育に対する課題でもあり、世界と我々がどうコミュニケーションしていくかの問題提起でもある。解決すべき課題は多いが、昔と比べると良くなってきて、フランス人にも褒めてもらえるところまで来た。そこを我々がどう理解していくか、非常に大きな課題をいただいた。

では、榊田委員、お願いします。

榊田委員

未来共創チーム会議の意見を聞いて、2つ感じたことがある。

1つは都市の魅力という観点について、未来共創チーム会議の皆さんの関心

事は、従来の都市計画で言われる、どこにどう住空間や商業空間を作るのかというように、まちの発展に向けたハード面の整備が従来型の都市計画のステレオタイプだとすると、そういった文面はほぼどこにも出てこない。逆に、人と人との関係性、社会的な弱い紐帯に絡んで、コミュニティを作っていくということに対して、きちんとまとまり切れていないが、紐帯と余白とウェルビーイング、支える、長期目線という5つの表現の中で、これからは人と人との共感を通じたコミュニケーションからなる、良質なコミュニティをどうやって作っていくかということが強調されていたと感じた。従来ではなくデジタルも使って弱い紐帯でつながる社会、そこにネットワークを作る。ここに関して、もう少し具体的に話を進めていかないと、そこで話が終わってしまうリスクがある。横のつながりを紐帯としてどうやって作っていくか。京都の人は結構抵抗があって、横の人とつながらないみたいなところがある。ここをどう具体的に、例えばどういったことをやっていくかということをもっと肉付けしないと、概念論だけで共創すること、コラボすることがいいことだが、何をやるかがはっきりしないというのがポイントだと感じた。

また、未完成だと思うが、京都市立芸大の移転に関して、市民一般の意見としては、まだまだ無機質に感じる。もっと芸術系のアートスクールというものは、サブカルチャーとかもっとぶっ飛んだことをやっていく力が通常の大学よりもあるということを期待する。こういうことを言うと、かなり固定概念、京都市立芸大はこの概念から外れてはいけないという守るものがあると感じる。もっと京都の魅力をもう一步進めていくうえで、京都芸術大学、精華大学、他の美術系大学と学生ベースでコラボして、コミュニティを作っていくなど、大学の執行部が本気出して取り組むということが一例だが、コミュニティベースの思想としては必要ではないか。

もう一つは、自分事、自分のまちとして感じるにはどうすればいいか。未来共創チーム会議の意見から出てきたが、主体性と義務と責任感というが、義務とか責任感、何かを任せられた人からしか出てこない。任せられて初めて責任感が生まれる。今の京都のまちづくりの問題の一つは、任せられてないから自分のまちだという責任感や義務感がないということ。その矛盾が若干あるのではないか。いかにして自分事にしていくか、自分のまちだということを、かなり多くの層で感じるような仕掛けを作るには、具体的なことを言っていないとこれも概念論で終わってしまう。自治の考え方をもっと具体化するイメージ。例えば、市長が一生懸命取り組んでいるタウンミーティングをもっと実施していく。市長中心ではなく、いろんな階層の人が、いろいろなテーマに対して、意見、提案をして、それを市政に取り上げていけるような仕組みを何か作ると、他のまちには無いことができるのではないか。北欧はすべてそういう市民参加型のタウンミーティング、最近ではデジタルタウンミーティングで、デジタル上でつながって国づくりに生かしている。例えば、ヘルシンキドットコムのような発想が大事。北欧では、シニアの方々が市民意識を強く持っていて、生涯、国のため、市のために貢献するのが生きがいと感じるには、すべて行政

でやってしまうのではなく、市民の方が半分ボランティア、半分ワークという形でまちづくりに参加する。そういったことをもっともっとやっていったら、「0.1市民」という言葉、全ての人が市民意識を持つということが、まちづくりにつながっていくきっかけになるのではと思う。

あと、若者・余所者・馬鹿者からイノベーションは起きるというときに、今回は若者の意見を強く聞いているが、京都には余所者として、留学生や、京都で働いているアカデミックでインテレクショナルな外国の方がいる。この方々が日本人以上に京都のことをよく理解している。この方々の意見をもっと聞くべきだと思う。なぜ京都に来たのか、京都に来て何を魅力に感じているのか、何を課題と感じているか、もっと京都に詳しい外国の方々の意見を聞いてみたいと思う。

最後に、京都、京都と言いきすぎだと思う。京都から見た世界、地球というのは京都の人には強すぎる。例えば、グレーター京都としての近隣他府県との連携において、もっと京都がやるべきこと、大阪や奈良や滋賀と意見交換して、それをビジョンに反映していくというようなバウンダリーな概念が、京都中心主義みたいなところが強すぎると、「所詮、京都の人は京都のことしか考えていない」と言われる。「人に優しい、地球に優しい」ことを考えていると言いながら、「人に優しい、京都に優しい」みたいになってしまうため、地域、場所の概念を広く取るべきではないかと感じる。

宗田会長

お二人の経済人のお話が、大学の教員以上に学者的で深かったので、議論が深まって良かった。

では、鈴鹿委員、お願いします。

鈴鹿委員

今のお話を聞いていてすごく共感するところもあったし、未来共創チーム会議の意見にも共感するところがあった。

堀場委員の意見にもつながるが、すごく教科書的な人が増えたという点について、最近感じたことがあった。この一か月間、いろいろな新年会に出席したが、「売上〇%目指して今年も頑張っていきます」という挨拶がある一方で、京都の老舗の集まりである「百味会」の新年会では、いつもそうだが、「大きく利益伸ばすのではなく、それぞれの店のやり方を今年も守っていきましょうね」と挨拶される。一見すごく消極的に思えるが、そこにいる方々は日々、常に何をしたら続けていけるかを考えている。それを独自に考えて、自分たちで守ろうということが各々にあるというのが、まさに京都的な在り方で、京都の市民もそういうふうに分たちで考えてきて動いてきたからこそ、まちづくりも独特に育ってきたのではないかと思う。一人一人、自分サイズの幸せと1000年先を見ることは、一見すると相反するように見えるが、自分たちの幸せを追求していくことが、結果的に1000年先につながると思うので、その

部分を対立なものとして見るのではなく、日々のところを見て、そして1000年先を見る。未来共創チーム会議の意見にもあったように、地図を描くのではなくコンパスを標すということはそういうことではないか。来年どうしましょうとか、25年先をどうしましょうではなく、1000年先にこうしたいから、その中で柔軟な部分、余白を作るのが大事だと感じていた。それを言い表せる言葉がなかなか見当たらないが、キーワードになるのではないか。

「0.1市民」の考え方は、素敵な考え方だと思っている。未来共創チーム会議の意見では、「京都を愛する人」という意見が出ていたが、これは京都市がどうだとか、市長がどうだとかではないが、行政のことを考えると、卒業してから京都にいつかない人が多くて困るという意見が出たときに、京都を愛して京都で育った人が、世界で活躍して京都のことを考えて、それぞれが生きているということが大事なのではないか。行政的に考えると市民税が入ってくるわけではないので、その人には権利がないというのが行政の意見かと思ってしまうが、そうではなくて「0.1市民」の考え、京都を愛する人も京都に意見を言ってくださいということを長期ビジョンに盛り込むことが、大前提として必要なのではないのか。その意見が出たときに、行政の中でそんな議論しているのかなと一瞬思ってしまったところもあるが、そうではなく京都市としては皆さん全員を受け入れていることを大前提として書いた方が、「そうなのだ」と、そこから自分事になるのではと思う。

宗田会長

学生は全国から集まってくるので、卒業後に残らない人がいて当然。市民参加の仕組みについては、京都でも30年近く前に市民参加推進条例を制定して、基本計画策定に当たって100人委員会を設置するなど、わりと進んできた。市民として関わる以外にも、例えば、全国各地に散らばっている茶道や華道をされている方たちも、京都に定期的に来てくださっている。そういう方たちが膨大な数がいらっしゃり、京都とつながっていて、京都の文化を全国に広めていってくれている。そういう方たちは、京都との関わりが結構あり、京都の関係人口として、京都を支えてくれている部分も多い。その最たるものがお茶、お花、絵画、音楽などの芸術分野だったりする。パリも全く同じ。そういうことも考えると、その方たちの意見も聞く、その方たちの上に成り立っているということを知覚するのは納得がいくところ。

鈴鹿委員

教育の話もあったが、京都で育っている人は、小さいころからその世界に入っている。何となく心に染み渡っているところがある。それが全てではないので、そういう京都の心を、どういう方法があるかわからないが、教育の面でできるということは、これから大事だと感じる。

宗田会長

それでは、松井委員、お願いします。

松井委員

この5年間、新型コロナウイルス感染症に対峙して、頭の中は危機管理でいっぱい。この会議でいつも思うのは、これからの25年間はとんでもない変化が起こると申し上げている。人口減少、少子高齢化、ひょつとすると南海トラフ、花折断層、10年くらいすると新興感染症も起こり得る。そのあたりのことを盛り込まないで将来を考えられるのかとは思いますが、それは新京都戦略の中、もしくは日々の行政の中で具体的にどうしていくか対策を考えられるものでもある。では長期ビジョンはどういうものかとなったときに、12,000字程度のものなので、あまり具体的なものは書ききれない。委員の皆さんがおっしゃるように、また未来共創チーム会議の意見にあるように、京都のひとの在り方、これから25年間、その先もそうだが、京都のまちを作っていくとか、災害を乗り越えていくひとの在り方を、みんなで考えるのがいいと思う。未来共創チーム会議の意見を読ませてもらって、私の心には「しなやかさ」とか、「人の強さ」、「生きる強さ」とか、「包容力」という言葉が浮かんできた。いろんなことを乗り越えていく、守っていくために必要なことだと感じた。特に私も高齢者なので、3点目の「脱成長・脱競争の社会へ。ベストだけでなくベターも認める」という言葉を聞いたら、社会の価値観はすでに変わり始めている、若い人たちはすでにしなやかさを身に付けていると感じていて、そこから出てくる言葉として「共生」が浮かんでおり、非常に感心して、感動しながら聞いていた。

宗田会長

それでは、高屋委員、お願いします。

高屋委員

未来共創チーム会議の意見は非常に参考になる。特に私に関係するところ、4点目の「誰もが“育む・支える”まなざしを持つ」については、福祉の関係を重視しているので、この考え方に意見いただいているのはありがたい。我々も会合で集まった時に、こういう考えがあるということは話をしていきたい。その重要な部分で、子育てや福祉については、もっと深い議論をしていきたい。

また世界文化自由都市宣言について、ノーベル賞受賞した日本原水爆被害者団体協議会がスウェーデンに行く際に、高校生3人くらいが大使として同行されたが、京都市も世界に誇れる大使みたいなものを発掘、募集して、世界に京都をアピールできる若い人を育てられるようなことを考えてもらいたい。

私は、伝統産業の京印章を生業にしているが、ここにおられる方もハンコを使われていると思う。我々のように手作りをしている伝統産業に共通することだが、家内生産をしている部分もあり、小さい規模のところは子どもに継承で

きている。しかし、もう少し大きい規模のところは、なかなか自分の子どもに伝統を伝えられていないところがある。私も店と住居が異なるため、ハンコを掘っているところや拵えているところを、子どもは実際には見ていない。伝統産業の形を考えていかないとまずいのではないか。いろいろと教えるために、京都に来ていただいたり、住んでいただいたりするのには理解するが、歌舞伎のようにああいう世界で伝統産業の業界はなかなか継承できていない。この辺りについては、もう少し継承する部分で考えていかないといけないと思っている。

宣伝になるが、京都市の協力で、地下鉄烏丸線に伝統産業の展示をした車両が走っている。烏丸線乗られる際は、見ていただければ。

宗田会長

伝統産業は重要な課題であるし、家族だけでなく、新しい担い手・支え手に継承していくことも重要。

京都は、国際交流基金もあり、文化庁も移転してきているので、文化親善大使の活動の一つの拠点になっている。また、金剛流の家元は小さな所帯で、フィレンツェやオスロで講演を行う際も、5～6人で行っている。そういう活発な活動もされているし、京都市も世界歴史都市会議に会長都市として参画しているため、積極的に世界に文化を伝えられると思う。裏千家は、世界に裏千家センターを持っているので、協力してもらえるところはあるのでは。

では、阪部委員、お願いします。

阪部委員

未来共創チーム会議から提示いただいた5つの価値観について、非常に共感しながら拝見していた。今までの議論でも出ていたが、京都に関わる多くの方が長期ビジョンを自分事として捉えて、まちづくりにいろんな形で参画できるベースを作るに当たって、1点目の「弱いつながりもデザインした「0.1市民」を数多く作っていく」というところについて感じた点は、私自身は住民票を置いたことはないが、審議会に参加させていただいているのは非常に恐縮だが、大学は同志社大学で、この会場のすぐ近くで、懐かしさを感じた。そういった私のように、私の認識では自分は0.5市民くらいに感じているが、大学が京都だったとか、仕事で京都に関わっていたとか、そういった人たちも巻き込んで、自分事として何らかの形で関わりを作っていけるということはすごくいいと思った。それが他にはない京都らしさにつながると思う。

4点目の「誰もが“育み・支える”まなざしを持つ」については、前回の議論の中でも出ていたが、前は女性の視点で、今回はそれも含めて若者、子ども、弱い立場の人というマイノリティのような人の視点が大切であるという視点を改めて大事にするということで、多くの方が主体的に関われるベースになる長期ビジョンを作っていけるのではと感じている。

宗田会長

では、福富委員、お願いします。

福富委員

未来共創チーム会議の意見については、非常に興味深く拝見していた。特に3点目の「脱成長・脱競争の社会へ。」というところを描けば、高齢化については、日本は世界の最先端を行っているので、それを世界に示していけるものになる。

4点目の「誰もが“育む・支える”まなざしを持つ」について。弱い立場の人々の視点を入れていただいてありがたいと思う一方で、その弱さが何によって作られるのかということが重要である。我々、福祉の立場からすると、支えがないから弱く追い込まれてしまうと感じている。支えを作ることで、追い込まれる人を少なくする取組は必要だが、この先に素晴らしい社会システムができて、社会から排除される人がいなくなるというユートピアのような社会が作れるかという点、今後も新しい課題は起こり続けるだろうと思う。その時に、ひとつのキーワードとして「余白」が出てきたが、これが大事になる可能性はある。支えがないという状況は、支えるシステムがない、人との関係性がないから生まれてくる。その時に、「余白」、「遊び」も同じことを指すのかもしれないが、ある状況では排除されている人が、ある状況の中ではそれなりにつながっていたりするということがある。そういう多様なつながりがあると、排除を少なくできるかもしれない。そういう人が弱い立場にいるように見えて、実は弱くない、強さを持っているという両面があると思う。また、弱い立場に追い込まれても、そこから立ち直っていけるレジリエンスみたいなものを生み出していくのが、余白なのかもしれない。

また先ほど会長の言葉にもあったが、余白の中に“marginal（周辺）”という意味もあって、そういう捉え方もできるなと思う。その反面、周辺に立ってみて初めて仕組みのゆがみが見えてくることもある。いろいろな人どうしのいろいろな関わりがある。それは鈴鹿委員の発言にもあった、「それぞれのお店のやり方を守ろう」ということであって、その中にそれぞれのつながりがあって、そこに強みを認識することができるので、排除されることの弱さは少なくできていくのではないかと感じている。

宗田会長

資料6で、審議会委員の意見とビジョン骨子の関係を整理しているが、何か御意見あればいただきたい。

では、貫名委員、お願いします。

貫名委員

1つは、前回の構成に関する部分について、将来のビジョンを示していくうえで、今日の議論は、高次の議論で情報が多すぎると思う。書き物としてはこ

れでいいのかもしれないが、この情報がつながってきて、最後に言おうとする
ことの背景につながるのか、少し整理する方がいい。具体的には第三章におい
て、第一節で世界の話、第二節は京都市のすがたとあるが、第一節と第二節が
対応しているようでしていない。果たして、ここに書いてあることがすべて長
期ビジョンに必要なのか。イラク戦争のこととか、二元論とか非常に重要な話
だが、市民にすんと落ちる必要な情報なのかは考えたほうがいい。それに関
連して、最終のアウトプットで文字は必要だが、例えばビジュアルのイメージ、
ポンチ絵みたいなもの、パッと見て伝わる工夫は、最終的には必要だと思う。

当初から申し上げているが、京都特有の話と他との共通の話が入り混じって
いる。京都の話をするというと、だいたいインバウンドで観光がどうのこうの
という話で、京都の人はそれが特別だと思っているが、それは、実は国際観光
客、世界で旅行している人が増えている。京都がすごく人気で、京都にだけ集
中しているというわけではなく、世界の情勢の中で今が起きている。今やろうと
していること、それには京都の状況があって、外的要因としてこういう状況が
あるという情報の整理が無いと、あまりにも情報量が多いというのが構成に関
すること。

もう1つは、今日議論にも出ていたが、第二章第一節で考えないといけない
と感じているのは、京都、京都と共通言語のように使っているが、京都のベー
スが京都の三山・鴨川・琵琶湖疏水等とある。確かにそうだが、25年前の構
想と今と何が違うかという、一つ大きいのは京北町との合併、これが非常に
大きくて、今は議論に挙がっていない。2005年に京北町が合併している。
京都市政について議論しているので、明治時代は上京・下京しかない時代から、
今は市域拡大して30倍近くになっていることを考慮しないといけない。過去
のリファレンス、参照点を考えるという意見もあったが、現在の京都の強み、
アンケートにもあったが、外の人が見るイメージ、京都の庭園やお寺というも
のは、実は昔は京都と言われる範囲ではなかった場所が、今や京都の強みにな
っている。名勝、庭園などは山麓にあった。

次の時代を考えるときに、今の京都は山も含んでいて、農地・林地が日本の
平均よりも高い割合で存在している。現在の議論はまちの中では正しいかもし
れないが、今の京都市域を考えたときに、果たしてこのまま京北の人が読んで
納得するかというと、ちょっと距離がありすぎる。人と自然とあるが、それは
あくまで都会の人のイメージで、普段山に入っている私のような者からすると、
その間をつなぐもの、農地・林地や農林漁業という部分が抜けていて、都市の
住民と自然とあまりに両極である。前回との違いで言うと、京北町と合併した
というところは、考えるべきかと思う。

宗田会長

京北の問題もそうだが、京都が中華思想にならないように、広い意味での京
都ということもある。実際、京都に通勤されている方はかなり広いエリアから
来られている。京都の範囲をどう定めるかについて、物理的、文化的、抽象的

にも考えたうえで、歴史的にも近代以前と近代以降とは異なる。もっと抽象的なのは、観光ビッグバンと言われて2010年代から外国人観光客が増える世界的に言われていたことが、予想通りに正確に今起きている。世界的情勢を語るときに、もう少し京都らしい表現があるかもしれないというときに、京都の言葉である程度語ったほうが、京都の長期ビジョン、京都の基本構想なので、読んでもらえるのではないかということにも関係するかもしれない。いずれにしてもちゃんと概念として捉えて、正確に言葉を大事にしていくべき。では、濱崎委員、お願いします。

濱崎委員

少し議論が戻るが、余白について、余白は、本当はないのではなく、あると思う。余白とは何かと考えると、余白を感じられるかどうかではないかと思う。点があるから余白を感じられる、真っ白だと感じられないのであって、なぜそれを感じられなくなったのかというところから、この数十年のまちづくりや京都を考えて、解釈できる、自由だということに至れるのか、そういう方向で考えてみてもいいかと感じた。ビジョンをパッと見たときに、自分がそこに入っていける余白を感じられるような、読みたいな、自分で解釈したいなと思わせる形になればいいと思う。

そして、身体性とも関わるが、肚落ちするということが大事である。これがキーワードになるという意味ではないが、理解の仕方というのは、頭だけではなく、感じ取ることでもある。先ほどは理詰めでみんなの合意が取れないという話もあったが、肚落ちするということは、それぞれが考えて行動しているがいざとなったら団結するという話にも通じるのではないかと思った。

宗田会長

市民の方がどこかに入り込める余白というのは印象に残ったが、松井市長が日頃からおっしゃっていることにもつながる。

では、曾我副会長、お願いします。

曾我副会長

異論を言うことになるかもしれないが、「市民0.1」はいいが、市民アンケートについてどなたも言及がなかったので、現に市民が何を考えているのかに目を向けたい。すると、まず経済ですと答えている。市民0.1の権利の話が出ているが、税金を負担してくださっているのは今ここに住んでいる方々。その方々が経済だと言っているのに、脱経済と言うのは、果たして届くのかなとは思っている。対立はあっていい。市民の皆さんは経済だとおっしゃるが、脱経済だと投げかけてもいいし、住んでいる人だけでないですよ、そういう人も含めてのものですよねと言ってもいい。ただ、そっちの方だけに向いていると捉えられてしまうのはよろしくないと思う。

脱成長・脱競争といっても、京都だけで済む話ではないし、周りが成長して

いくと相対的に貧しくなってしまう。すでに円安で物価が上がっていることで、しんどくなってきているし、我々はこのままでいいと言っている、世界は成長していき、周りはどんどん給料は上がっていくというときに、我々の給料がそのままでは生活はしんどくなる。経済以外、成長以外もあるというのは全然いいが、経済否定みたいにならないようにする方がいいと思う。

市民以外も見てもいいが、そこには利害対立はある。外からどんどんと来られて市民は困っている、ここをどういう対話をして、どう話をつけるのかというところまでいかないといけない。あともう一步かなと感じる。

それとも関わるが、現時点でこうだと決めつけずに、今後もずっと決めていく、対話していくという仕組みをどう作るのかが大事。広い意味での政治になるだろうが、いろんな対立や共通部分もある人達が、どういう形でこの京都の在り方を考えていけるのか、そういう仕組みを作っていけるのかどうか。京都市という単位ではなく、もっと狭い単位で、そこにいろんな人たちが入っていく、市民参加の在り方。世界中でいろんな形の民主主義の在り方が進んでおり、くじ引き民主主義みたいな言い方もするが、審議会のような形で選ばれた人たちではなくて、いろんな人が入って考えていくミニパブリックスのような場を設けていくのかということとセットで、オープンにして今後も考えていく。そこには対立もあるし、共通部分もある中で、どう方向性を見出していくかという仕組みが必要になってくるので、その辺りの話がもう少し入ってくるといい。

ビジョンの骨子案について、各節についてはまちの在り方だからこれでいいが、中に書くことはもっと主語と動詞がある方がいい。未来共創チーム会議の意見にあったように、今後どういう形で自分たちも含めてやっていくのかということが、ビジョンに出てくるためには、記載内容のところで、誰が何をするという動詞がある方がいいと思う。

宗田会長

では、安保副会長、お願いします。

安保副会長

未来共創チーム会議の意見のうち、1点目の「弱いつながりもデザインした「0.1市民」を数多く作っていく」について、人だけではなく動植物や機械も対象にするというところは、いろんなところに通じるもの。例えば、人権について、もともとは男性を中心としたところでは人権は語られなかったが、それがいろんな民族も人権の対象になって、女性も対象にもなり、自然の権利も訴えられるようになってきた。もともとの観念が狭かったところが広がっていくというのが歴史の歩みなので、その歩みの一つかと思う。京都市は市民の生活を支える責任があるが、市民の生活は、すごく雑多である。雑多なところをきちんと支えられないと、市民の生活は続けられないところがある。その雑多なものを短い文章の中でどうつなげていくかという点については、工夫がいると思った。

宗田会長

雑多なものがいろいろ入ってくるだろう。また、次の25年は我々が厳しい試練に向かうこともあるだろう。試練があるからこそ、誰ひとり取り残さないということが大事になる。

神戸の大学で学部長しているので、1月14日に3学部の学生に対して、阪神・淡路大震災の黙祷をするときに講話をする機会があったが、私は当時から京都に住んでいたので実際に体験していないため、学生にどういう話をするか悩んだ。試練の前で市民力が発揮されるものだと思う。若者の力や高齢者の知恵、知識をどう生かせるか。そういう部分が、未来共創チームの意見の4点目の「誰もが“育む・支える”まなざし」というところに出ている。我々の態度、哲学の根底にあるべきだと感じた。我々が豊かになった、十分成熟したということが、我々の態度として出てくるようなものを導いていくのが重要になってくる。そういう長期ビジョンの在り方になればよい。

最後、松井市長、お願いします。

松井市長

今日も熱心な議論をいただき、感謝申し上げます。また、杉田委員は審議会委員と未来共創チーム委員の両方の立場を兼ねていただいて、大変わかりやすく説明いただき、感謝する。委員の皆様には、それぞれに関心を抱く発言をいただき、本当に感謝申し上げます。

2050年という、私は生きているかはわからないし、当然市長ではないが、その中で大きな時代の方向性と、過去から引き継いできたものの両方を体系化したものが必要と思っている。大きな自然災害が発生するかは確率で分かっている。京都よりも他の地域が甚大な被害を受ける可能性もあるし、大きなスパンで言うと、京都がこれだけ多くの人を受け入れるようになったことや、市域が拡大していることも含めて、京都のまちがすごく変容してきている中で、先ほどから議論になっている市民・非市民に関連するが、非市民の方の負担なくしてこのまちは成り立たなくなっている。それが、私が市長に就任する前のいわゆる空き家税の議論もそうだが、空き家をどうするかという問題だけではなく、分住する方々からどういう御負担をいただくか、あるいは、これから課題になっていく宿泊税の在り方も、京都というまちの魅力を保っていくために、京都の外側から来る方々に、どれだけの負担をしていただいて、その方々に納得感を持っていただかなければならない。そういう意味では、市民だけではない。京都のまちを維持していく、発展させていく、そこには景観を維持するようなことも含めて、魅力を残して発展していくために、どういう負担の在り方を考えていくのか、それをどう納得感を持っていただくのか、市民対話、あるいは市民の枠にこだわらない対話型の行政を進めていくのかは大切な問題。

また、住民参画の在り方を具体化していかないといけないのではないか。その範囲を京都市全体の参加の在り方だけではなくて、もう少し地域のコミュニティを細かく区切った参加の在り方、デジタルも含めた参加の在り方を考えて

いく。高齢化の中で、市民アンケート結果にもあったが、相当程度、京都の問題であると同時に、日本全体の問題が包含されている中で、多くの市民をはじめとした方々とコミュニケーションを図っていくのが大事で、そのやり方をどうしていくのか。地域が高齢化していて、マンション住民や外部から入ってこられた方々を取り込めていない。京都市は市政協力委員という良い制度を作ったなと思うが、その制度を本当は中長期的には、その在り方をどうしていくのか。もう少し幅広く市政に協力していただく、あるいは広報・広聴ということは基本であるため、それを対話と捉えて、弱い紐帯の方々も含めて、域外の方々も含めて、市政に参加していただくのかということも含めて、どこまでビジョンの中に書き込めるかわからないが、ビジョンの思いを受け止めて、我々が行政課題として、10年、20年かけて取り組むべきことが、ここを見れば滲み出ているというビジョンにしていくために、みんなで意見交換しながら作っていかないといけない。大変な課題をたくさんいただいたが、やりがいのある議論だと思っているので、今後ともよろしく願います。

宗田会長

一言だけ付け加えると、人口減少しているので生産年齢人口が減っている中で、働いている人の数は増えている。女性と中高年と外国人であるが、市政協力委員のように、中高年の活動には可能性があるのも、それを京都から示せるとよい。

松井市長

外国の方々も含めてどう協力していただけるかも重要。国内外からの様々な来訪者ということも含めて。

宗田会長

第5回の審議会については、長期ビジョンの全文を審議させていただく。では、事務局に進行をお返しする。

(2) 事務連絡

司会（都市経営戦略監）

それでは、以上をもって第4回京都市総合計画審議会を閉会する。

3 閉会

(以上)